

資料 Data

# 広島文理科大学動物学教室における卒業論文

山内健生<sup>1</sup>

Undergraduate theses in Zoological Laboratory, Hiroshima University (1932-1953)

Takeo YAMAUCHI<sup>1</sup>

**要旨：**広島大学前身校の一つである広島文理科大学は、東京文理科大学と同様、主として中等学校教員の養成を主要な目的として設立された「旧二文理大」の一つである。広島文理科大学動物学教室における1932年（昭和7年）の第1回卒業生から1953年（昭和28年）の最後の卒業生までの卒業生約120名について、卒業論文と指導教官を整理し、一覧表を作成した。これに基づき、広島文理科大学動物学教室における教育研究の変遷、及び現在の広島大学における動物学研究との関連などについて考察した。

**キーワード：**広島文理科大学、動物学、卒業論文、指導教官、研究材料

## I. はじめに

広島文理科大学（以下、文理大）は、広島高等師範学校（以下、高師）の専攻科を改組する形で設立された官立の旧制大学である（図1、所在地：広島県広島市中区東千田町）。東京文理科大学と同様、主として中等学校教員の養成を主要な目的として設立された「旧二文理大」の一つである。文理大には、教育学科、哲学科、史学科、文学科、数学科、物理学科、化学科、生物学科、および地学科が設置され、これらは現在の広島大学文学部、教育学部、および理学部の構成母体である。なお、生物学科には、動物学専攻（動物学教室）と植物学専攻（植物学教室）が設けられた。

文理大では1929年（昭和4年）4月22日に第1回入学式が挙行され、動物学専攻の第1回生6名も入学した。修業年限は3年で、彼らは1932年（昭和7年）に第1回卒業生となった。それから1953年（昭和28年）の最後の卒業生（第23回卒業生）までの卒業生約120名が動物学教室で卒業研究を行なった。文理大の学生には高師出身者が多く、社会人（特に教職）経験者が多かった。

1945年8月6日、アメリカ軍によって投下された原子爆弾により、広島市は壊滅的な被害をこうむり、文理大も全焼した。このため、動物学教室に関する資料もほとんどが失われてしまい、それ以前の教育研究の具体的な内容についても不明な点が多い。また、そ

れ以降においても終戦後の混乱があり、動物学教室においてどのような教育研究が行われたのかは、ほとんど知られていない。

卒業研究のテーマには、指導者層の教育や研究の姿勢、方策などが反映されていると考えられる（福井、2000）。したがって、卒業研究のテーマを整理することで、広島文理科大学動物学教室における教育研究の動向を大まかに把握するができると考えられる。そこで、1932年（昭和7年）に卒業した第1回卒業生から1953年（昭和28年）の最後の卒業生までの約120名について、卒業論文と指導教官を整理し、動物学教室における教育研究の変遷について調査を実施した。



図1 広島文理科大学（出典：著者所蔵絵葉書の裏面に印刷された写真）

<sup>1</sup> 富山県衛生研究所：Toyama Institute of Health

II. 沿革

本論文内容の理解を助けるため、主として広島文理科大学創立五十周年記念事業会(1980)と稲葉(2005)を参考に、主要人物を中心とした文理大動物学教室の沿革を述べる。教授あるいは助教授として文理大動物学教室(附属臨海実験所を含む)に勤務した9名については、表1に在職期間を示した。

1929年(昭和4年)4月、動物学教室の発足にあたり、高師教授であった阿部余四男(1891~1960, 図2A)が教授に着任し、脊椎動物学と動物細胞学組織学の講義と実験を担当した。高師学生主事であった高橋 祥(?~1940)が兼任教授となり、動物発生学の講義を担当した。また、高師助教授であった藤原力(1895~1945)が助手となった。これらの教官によって、動物学専攻の第1回入学生6名を対象として最初の授業が開始された。

1930年(昭和5年)、九州帝国大学農学部付属天草臨海実験所講師であった平岩馨邦(1897~1967, 図2B)と東京帝国大学理学部動物学教室助手であった尾崎佳正(1891~1976, 図2C)が、それぞれ助教授として着任した。平岩は実験動物学の講義と実験を、尾崎は無脊椎動物学の講義と実験を担当した。

1932年(昭和7年)3月に第1回卒業式が挙行され、卒業生の佐藤井岐雄(1902~1945)が助手に採用さ

れた。

1933年(昭和8年)、第2回卒業生(1933年3月卒業)の川村智治郎(1906~2003)が助手に採用された。同年、広島県御調郡向島西村(現在の尾道市)に附属臨海実験所が設置されるに伴い、初代所長として阿部余四男が兼任し、京都帝国大学理学部動物学教室の瀧 巖(1901~1984)が助教授として着任した。

1937年(昭和12年)、高橋 祥教授の退官により、平岩馨邦助教授が教授に昇進し、動物発生学の講義と実験をも担当することとなった。同年、佐藤井岐雄助手と川村智治郎助手がそろって講師に昇任した。

1940年(昭和15年)、第9回卒業生(1940年3月卒業)の鈴木正将(1914~2011)が副手に採用された。

1941年(昭和16年)、鈴木正将副手は陸軍の現役兵として軍務に服した。同年、文理大に助手講師定年制の内規が作られ、助手と講師は、猶予期間中に助教授へ昇進するか、さもなければ文理大を辞めて出てゆかねばならなくなった。同年7月31日、佐藤井岐雄講師と川村智治郎講師に理学博士の学位が授与された。同年12月27日、修業年限3ヵ月短縮により、第11回卒業式が挙行された。

1942年(昭和17年)9月23日、修業年限6ヵ月短縮により、第12回卒業式が挙行された(これ以後1947年まで、卒業式は9月に実施された)。

1943年(昭和18年)8月、佐藤井岐雄講師が助教授に昇進した。

1945年(昭和20年)、川村智治郎講師が京都帝国大学臨湖実験所講師として転出した。1月31日付であったが、残務処理もあり、川村講師が実際に赴任したのは同年4月であった。これは1941年に制定された助手講師定年制の内規により、川村講師は文理大を辞めねばならなかったためである。同年7月末、3年生の発案で、重要機器や図書の疎開を行なうこととなり、これらを箱詰めし広島駅へ運び込んだ。8月6日午前中に疎開先である高田郡向原町(現在は安芸高田市)へ芸備線で出発する予定となった(増田, 1980)。

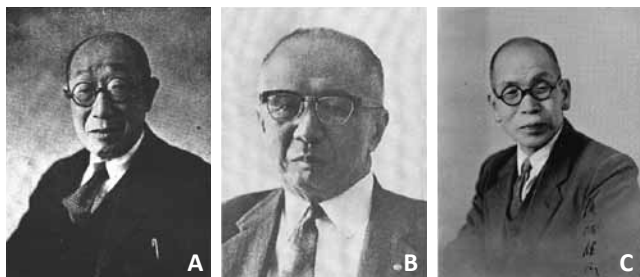


図2 戦前に指導教官を務めた3名。A:阿部余四男(1891~1960), B:平岩馨邦(1897~1967), C:尾崎佳正(1891~1976)。(出典:Aは『広島大学生物学会誌6巻2号』, Bは『九州大学農学部畜産学科50年史』, Cは『広島大学生物学会誌26号』)

表1 教授あるいは助教授として広島文理科大学動物学教室(附属臨海実験所を含む)に勤務した9名の在職期間

	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953
阿部余四男	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃
高橋 祥	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃
平岩馨邦	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃
尾崎佳正	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃	濃
佐藤井岐雄																									
川村智治郎																									
鈴木正将																									
皆森寿美夫																									
瀧 巖																									

濃い塗りつぶし: 教授あるいは助教授としての在職期間  
 薄い塗りつぶし: 講師, 助手, あるいは副手としての在職期間

同年8月6日午前8時15分、原子爆弾が投下され、広島市は壊滅し、爆心地から1.5kmの距離に位置する文理大も全焼した。文理大本館の教官室にいた阿部余四男教授はガラス破片傷を受けたが全快した。朝食をとりに広島市宝町の自宅に帰っていた平岩馨邦教授は、倒壊した自宅の下敷きとなり、脊椎を負傷して歩行不能となった。この後、平岩教授は東大病院へ入院した(浅沼, 1975; 中根, 1980)。佐藤井岐雄助教授は、前述した疎開先への荷物送り出しに立ち会うため、疎開先から広島市広瀬町の自宅に帰っていた。そして、爆心地付近である市内電車十日市町電停付近にて被爆し、全身火傷を負って6日後に他界した(宇都宮, 2001)。尾崎佳正助教授は、備品図書疎開のため先に向原へ行っており、被爆をまぬがれた。動物学教室学生の被爆者も多数おり、中でも井上茂樹(3年生)、高田研至(3年生)、張秀英(2年生、旧満州国からの女子留学生)、団寿夫(1年生)は、8月6日当日あるいは数日以内に死亡した。以上の人的被害に加えて、動物学教室はこの日、貴重な文献、研究機材、標本、そして教育研究の場を失った。

1946年(昭和21年)4月、復員した鈴木正将助手が助手となった。同年8月、京都帝国大学講師の川村智治郎が助教授として着任した。広島を離れていたため、川村助教授の研究材料は基本的に無傷であった。

1947年(昭和22年)、平岩馨邦教授が九州大学農学部教授として転出し、鈴木正将助手が講師に昇任した。

1948年(昭和23年)、尾崎佳正助教授が教授に昇進した。

1949年(昭和24年)、鈴木正将講師が助教授に昇進した。同年5月31日、国立学校設置法公布により、新制広島大学が設置され、文理大は広島大学に包括され、広島大学広島文理科大学と改称された。これに伴い、附属臨海実験所は広島大学理学部附属施設となった。旧制大学としての文理大では引き続き在学生の教育が行われた。

1950年(昭和25年)、臨海実験所の瀧巖助教授が教授に昇任した。同年12月、第14回卒業生(1944年9月卒業)の皆森寿美夫(1917~2013)が助教授として着任した。

1951年(昭和26年)4月、新制理学部の動物学は三講座制となったため、川村智治郎助教授が教授に昇進し、阿部、尾崎、川村の3教授体制となった。

1953年(昭和28年)3月、第23回卒業生を送り出し、文理大の動物学教室は終幕を迎えた。

### Ⅲ. 調査方法

卒業生の氏名と卒業年は、主として『平成十六年度年次別会員名簿』(朝倉, 2004)に基づいた。

卒業研究のテーマと指導教官は、主として『博物学会誌』(後の『生物学会誌』)の「雑報」や「研究室だより」に基づいたが、その他の文献も参照した。卒業研究のテーマが不明な卒業生については、その人物の在学中あるいは卒業後2年以内に発表された論文のうち卒業研究の一部と考えられるものを挙げた。その文献の内容が卒業研究のテーマを反映している可能性が高いと推測している。

### Ⅳ. 卒業研究の内容

1932年(昭和7年)に卒業した第1回卒業生から1953年(昭和28年)の最後の卒業生までの卒業生約120名について、卒業論文と指導教官を整理した(表2)。また、卒業研究で用いられた動物を大まかに整理した。これによると、戦前は、阿部余四男が組織学や細胞生物学など、平岩馨邦が実験形態学、尾崎佳正が記載分類学について、ほぼ均等に卒研学生を担当し、指導していたことがわかる。なお、当時、講師は卒業研究を直接指導できる立場ではなかったが、名目上の指導教官とは別に実質的には講師が研究の指導を行なった場合もあったようである。例えば、1938年(昭和13年)3月卒業の宮内力と1939年(昭和14年)3月卒業の青田重忠については、卒業研究のテーマで佐藤井岐雄(当時講師)との共著論文(佐藤・宮内, 1937; 佐藤・青田, 1940)が出版されていることから、実質的な指導者が佐藤であったことがわかる。また、1937年(昭和12年)3月卒業の友広賢と1940年(昭和15年)3月卒業の鈴木正将もザトウムシ類について佐藤による研究指導を受けた(鶴崎, 2011, 2012)。その他、1940年(昭和15年)3月卒業の三上(古月)武夫の実際の研究指導は当時講師であった川村智治郎が行なったことが後に明らかにされた(川村, 1963)。戦後は、戦前に卒業研究の指導教官であった3名(阿部、平岩、尾崎)から平岩が抜け、代わりに川村が加わった形となった。

教官ごとの指導学生数は以下の通りであった: 阿部(41名)、平岩(20名)、尾崎(27名)、川村(14名)、瀧(1名)。ここに含まれていない13名は指導教官が不明であった。動物学教室発足当初から文理大の終幕まで教授であった阿部が最も多くの学生を指導していた。初期に兼任教授であった高橋祥は、卒業研究の指導に関与していなかったと考えられる。また、臨海実習所にいた瀧巖は、基本的には卒業研究の指導に

表2 広島文理科大学動物学教室における卒業論文

卒業年月	名前	区分* 卒業研究題目	研究材料	指導教官 (その根拠)
昭和7年 (1932年) 3月	木下好治	II Influence of castration on the secondary sexual characters of <i>Rana limnocharis</i> (紀要2巻)	スマガエル	阿部 (森田, 1955)
	佐藤井岐雄	I 日本産有尾類の分類及び染色体 (博物学会誌1号)	両生類 (有尾類)	阿部 (森田, 1955; 曾根原, 1959)
	曾根原周平	II Studies on the effects of X-rays upon the development of pond snail, <i>Lymnaea (Radix) japonica</i> Jay (紀要2巻)	モノアラガイ	平岩 (論文謝辞)
	田中正夫	— 不明	不明	不明
	都倉芳虎	II Histological studies on the dermal functions, with special reference to the changes of the colour of <i>Gekko japonicus</i> (Dumeril et Bibron) (紀要2巻)	ニホンヤモリ	阿部 (論文謝辞)
	森田真一	II Quantitative Untersuchungen ueber die Schilddruese von <i>Bufo</i> in Beziehung zur Metamorphose (紀要2巻)	ヒキガエル	阿部 (森田, 1980)
昭和8年 (1933年) 3月	飯塚宗之助	II Two new gregarines from <i>Urechis unicinctus</i> von Drasch (紀要2巻)	原生動物 (胞子虫)	尾崎 (論文謝辞)
	川村智治郎	I ウズラの初生羽における色素形成について (生物学会誌30号)	ウズラ	阿部 (論文謝辞)
	木下敏之	II A new case of hermaphroditism in <i>Carassius auratus</i> (L.) (紀要2巻)	フナ	阿部 (論文謝辞)
昭和9年 (1934年) 3月	小林晴夫	II 鱗数に現れたる鮭の個体変異 (博物学会誌3号)	フナ	阿部? (小林 [晴], 1955)
	下森喜代一	II Histology of the integument of <i>Siphonoma cumanense</i> (Keferstein) (紀要4巻)	星口動物 (ホシムシ)	阿部 (研究内容からの推定)
	田中正秀	— 不明	不明	不明
	柳生亮三	II Studies on the ciliates from the intestine of <i>Anthocardis carassispina</i> (A. Agassiz) (紀要2巻). Studies on the ciliates from sea urchins of Yaku Island, with a description of a new species, <i>Cryptochilidium ozakii</i> sp. nov. (紀要3巻)	原生動物 (繊毛虫)	尾崎 (論文謝辞)
昭和10年 (1935年) 3月	八幡道生	II Studies on the excretory system of <i>Glythelmins rugocaudata</i> (Yoshida) (紀要3巻)	扁形動物 (二生類)	尾崎 (論文謝辞)
	石木 仁	I アワブネ、ヒラフネガイの sex-phase	巻貝	平岩 (博物学会誌2号の記述)
	斉藤 勲	I イタチムシ類 [の分類学]	腹毛動物 (イタチムシ)	尾崎 (博物学会誌2号の記述)
昭和11年 (1936年) 3月	高柳常次	I 蛙の Liber の pigment について	カエル	阿部 (博物学会誌2号の記述)
	稲葉文枝	I かき卵における実験発生	カキ	平岩 (博物学会誌3号の記述)
	小黒善雄	I 両生類の寄生虫 [の分類学]	両生類の寄生虫	尾崎 (博物学会誌3号の記述)
	佐藤尚勝	I 両生類の皮膚におけるエバース氏像について	両生類	阿部 (博物学会誌3号の記述)
	佐藤民部	I やどりむし (ボビリッド) のアカエビの性に及ぼす影響	甲殻類 (ヤドリムシ)	平岩 (博物学会誌3号の記述)
昭和12年 (1937年) 3月	野々山次郎	I 爬虫類の舌における感覚器	爬虫類	阿部 (博物学会誌3号の記述)
	岡田相之助	I 海産節足動物の細胞学的研究	海産節足動物	阿部 (博物学会誌4号の記述)
	富本 (小川) 市平	I 軟体動物の発生機構について	軟体動物	平岩 (博物学会誌4号の記述)
	友広 賢	I 陸産節足動物の細胞学的研究	ザトウムシ	阿部 (博物学会誌4号の記述)
	東辻 弘	I 扁形類に寄生する渦虫の [分類学的] 研究	扁形動物 (渦虫)	尾崎 (博物学会誌4号の記述)
	福田政次郎	I 哺乳動物の発生機構について	哺乳類	平岩 (博物学会誌4号の記述)
昭和13年 (1938年) 3月	井上幹造	I 寄生等脚類の性に関する研究, 特にサヨリヤドリムシを材料として	甲殻類 (サヨリヤドリムシ)	平岩 (博物学会誌5号の記述)
	眞田正夫	I 寄生等脚類の性現象に関する研究, 特にタイノエを材料として	甲殻類 (タイノエ)	平岩 (博物学会誌5号の記述)
	高松好文	I 実験発生学的に見たる卵内基礎物質の研究	不明	平岩 (博物学会誌5号の記述)
	福井利人	I 牛胃寄生原虫に関する [分類学的] 研究	原生動物	尾崎 (博物学会誌5号の記述)
	宮内 力	I Untersuchungen über Physiologie und Histologie des Eileiters der Amphibien	両生類	阿部 (博物学会誌5号の記述)
昭和14年 (1939年) 3月	青田重忠	I メクラヘビの組織学的研究	メクラヘビ	阿部 (博物学会誌6号の記述)
	徳永千代子	I 両生類及び魚類の性に関する実験的研究	両生類, 魚類	平岩 (博物学会誌6号の記述)
	早川田能実	I コウモリの細胞学的研究	コウモリ	阿部 (博物学会誌6号の記述)
	藤田 亮	I ナメクジウオの細胞学的研究	原索動物 (ナメクジウオ)	阿部 (博物学会誌6号の記述)
	武藤義信	I 両生類の性に関する実験的研究	両生類	平岩 (博物学会誌6号の記述)
	山田誠一	I コウモリの核学的研究	コウモリ	阿部 (博物学会誌6号の記述)
昭和15年 (1940年) 3月	石崎英夫	I 粘液胞子虫の研究	粘液胞子虫	尾崎 (博物学会誌7号の記述)
	岩本新一	I <i>Rana nigromaculata</i> [トノサマガエル] ♀ × <i>Rana rugosa</i> [ツチガエル] ♂ における Kern の行動	カエル	平岩 (博物学会誌7号の記述)
	鈴木正将	I Untersuchungen über die Spermatogenese der Opiliones	ザトウムシ	阿部 (博物学会誌7号の記述)
	三上 (古月) 武夫	I Aniline 染料を作用せしめたる Sperm による pseudo-fertilization の研究	両生類?	平岩 (博物学会誌7号の記述)
	宮本正一	I 水黽 [アメンボ] の発生学的研究	アメンボ	平岩 (博物学会誌7号の記述)
昭和16年 (1941年) 3月	倉茂好雄	I 魚類の粘液腺及び血球に関する研究	魚類	阿部 (博物学会誌8号の記述)
	田村正克 (鄭 火土?)	I 爬虫類及び両生類に寄生する吸虫の形態学的分類学的研究	扁形動物 (吸虫)	尾崎 (博物学会誌8号の記述)
	三井辰雄	I <i>Apocepon pulcher</i> Nz. & B. à B. [マメコブシヤドリムシ] 及び <i>Saculina</i> sp. [フクロムシ類] のマメコブシガニの sex に及ぼす影響に就いて	甲殻類 (ヤドリムシ, フクロムシ)	平岩 (博物学会誌8号の記述)
昭和16年 (1941年) 12月	品川恭徳	I 脊椎動物赤血球に於ける細胞内含有物に就いて	脊椎動物	阿部 (博物学会誌9号の記述)
		II 鱗牛類生殖細胞に於けるゴルジ物質の変異並びに染色体数の研究	カタツムリ	阿部 (博物学会誌9号の記述)
	鈴木庄一郎	I 日本産繊毛虫類の研究	原生動物 (繊毛虫)	尾崎 (博物学会誌9号の記述)
	中西 武	I 昆虫に於ける色彩の生成機構に就いて	昆虫	阿部 (博物学会誌9号の記述)
	野田親治	I 等脚類の性に関する研究	甲殻類 (等脚類)	平岩 (博物学会誌9号の記述)
	星出 (津川) 兵馬	I 寄生原虫に就いて	原生動物	尾崎 (博物学会誌9号の記述)
	守屋勝太	I 日本産セルカリヤの研究	扁形動物 (吸虫)	尾崎 (博物学会誌9号の記述)
	鷲尾倭文	I 牡蠣の性に関する研究	カキ	平岩 (博物学会誌9号の記述)
昭和17年 (1942年) 9月	大塚外次	I 昆虫の変態機構に就いて	ハバチ	阿部 (博物学会誌10号の記述)
	岡本慶文	I 寄生性渦虫類の [分類学的] 研究	扁形動物 (渦虫)	尾崎 (博物学会誌10号の記述)
	小幡謙一郎	I 日本産昆虫類の寄生蟻虫に就いて	原生動物	尾崎 (博物学会誌10号の記述)
	金子 繁	I 寄生性繊毛虫類の研究	原生動物 (繊毛虫)	尾崎 (博物学会誌10号の記述)
	隋 文彬	I 昆虫の染色体の研究	昆虫	阿部 (博物学会誌10号の記述)

昭和18年(1943年)9月	大垣昌弘	II	ユスリカ幼虫の触毛に就いて(予報)(動物学雑誌55巻),ユスリカ幼虫の唾液染色体標本作成法(博物学会誌11号)	ユスリカ	阿部(研究内容からの推定)	
	奥田義雄	—	不明	不明	不明	
	三宅 新	—	不明	不明	不明	
	瀬光一雄	II	甲殻類に於ける所謂寄生虫去勢の現象と寄主の性機構との関係(博物学会誌11号)	甲殻類	平岩(論文謝辞)	
昭和19年(1944年)9月	吉倉 眞	I	ジグモの糸腺の組織学的研究	ジグモ	阿部(吉倉,1987)	
	稲葉明彦	I	有肺類の分布,細胞組織・染色体	有肺類(カタツムリ)	阿部(稲葉,2005)	
	皆森寿美夫	—	不明	不明	阿部(皆森,1955)	
	鹿戸武治	II	Studies on the chromosomes of <i>Ranatra chinensis</i> Mayer(遺伝学雑誌22巻)	ミズカマキリ	阿部(皆森,1955)	
昭和20年(1945年)9月	紫部(三好) 武士	—	不明	不明	不明	
	小林 晶	—	不明	不明	阿部?(小林[晶],1955)	
	豊岡磊造	—	不明	不明	不明	
	中根一芳	—	[シロネズミ関係?]	シロネズミ?	平岩(平岩,1949;中根,1980)	
昭和21年(1946年)9月	本田伊豫	—	不明	不明	不明	
	浅沼昌平	—	[シロネズミ関係?]	シロネズミ?	平岩(森川,1955;浅沼,1975)	
	森川国康	—	不明	不明	佐藤→阿部(森川,1955)	
	西村一夫	—	不明	不明	尾崎(森川,1955)	
昭和22年(1947年)9月	蛭谷米司	II	カスミサンショウウオの地方種類(動物学雑誌58巻)	カスミサンショウウオ	川村(寺川,1981)	
	門 洋一	II	マガキ( <i>Ostrea gigas</i> )の変形細胞の顆粒の性質について(動物学雑誌60巻)	マガキ	瀧(門,1980)	
	馬淵春次	—	不明	不明	不明	
昭和23年(1948年)3月	増田 昇	—	不明	不明	不明	
	渡辺強三	II	イモリの地方種族間交雑について(静岡大学教育学部研究報告1号)	イモリ	川村(研究内容からの推定)	
	石窪 繁	—	不明	不明	不明	
	岡村吉人	—	不明	不明	不明	
昭和24年(1949年)3月	新池 保	II	両棲類の前腎及び中腎の発生に関する実験(1)(動物学雑誌59巻)	両生類	阿部(研究内容からの推定)	
	入江 学	—	不明	不明	不明	
	片島 亮	I	[寄生性繊毛虫である無口類 <i>Astomata</i> の研究]	原生動物(繊毛虫)	尾崎(小阪,1976)	
	三分一肇	II	ミヤイリガイの生態学的観察および原虫の生活史の追求,並びに寄生去勢の問題(生物学会誌1巻1号)	ミヤイリガイの原虫	尾崎(研究内容からの推定)	
昭和25年(1950年)3月	松尾(河手) 佐代子	—	不明	不明	不明	
	栗原 篤	I	蛙の甲状腺の生理的变化	カエル	阿部(研究内容からの推定)	
	瀧光晋作	I	クロサンショウウオ及び金光のカスミサンショウウオを材料にした生殖細胞の起源追及	サンショウウオ	川村(瀧光,1963)	
	宮田澄男	I	蛙を用いて4倍体の作成	カエル	川村(宮田,1963)	
	大塚英司	I	トリバフラビンを用いた半数体の作成	不明	川村(研究内容からの推定)	
昭和26年(1951年)3月	田中斐太夫	I	浅水産貝類の染色体	貝類	阿部(研究内容からの推定)	
	内海耕睦	I	<i>Stentor</i> に種々なる電流を付与した下で,イオンのCiliaに与える影響及び高周波の影響に就いて	原生動物(繊毛虫)	尾崎(生物学会誌2巻2号の記述)	
	洲濱幹雄	I	<i>Euplotes</i> 及び <i>Stylonychia</i> のX線照射による生理及び形態の変化に就いて	原生動物(繊毛虫)	尾崎(生物学会誌2巻2号の記述)	
	平 俊文	I	<i>Drosophila virilis</i> [クロショウジョウバエ] を材料として,地方種間の色々な問題	クロショウジョウバエ	阿部(生物学会誌2巻2号の記述)	
	長谷川和	I	<i>Chironomus</i> [ユスリカ属] の幼虫・蛹・成虫時に於ける組織の変異移行に就いて	ユスリカ	阿部(生物学会誌2巻2号の記述)	
	美田 正	I	松喰虫の生態学的研究特に環境因子たる温度との関係	松喰虫	阿部(生物学会誌2巻2号の記述)	
	森脇徳三	I	西日本産スマガエルの背線の発現機構に関する遺伝学的及び実験形態学的解析	スマガエル	川村(生物学会誌2巻2号の記述)	
	宮里昌教	I	白ネズミに発生する癌物質(腹水)の <i>Paramecium</i> に対する影響に就いて	原生動物(繊毛虫)	尾崎(生物学会誌2巻2号の記述)	
	昭和27年(1952年)3月	池田 章	II	日本産 <i>Euplotes woodruffi</i> Gaw について I. 形態・接合及び分裂における大核の特異なる現象(動物学雑誌64巻)	原生動物(繊毛虫)	尾崎(研究内容からの推定)
		兼田正男	I	<i>Chlamydomon</i> について	原生動物(繊毛虫)	尾崎(生物学会誌3巻2号の記述)
重松昭世		I	海産(年鹹水)繊毛虫に於ける分裂について	原生動物(繊毛虫)	尾崎(生物学会誌3巻2号の記述)	
西村清定		I	冷却処理により発生したドジョウの核について	ドジョウ	川村(生物学会誌3巻2号の記述)	
水岡繁登		I	サンショウウオに於ける性分化について	サンショウウオ	川村(生物学会誌3巻2号の記述)	
吉田(仲上) 正雄		I	Hydration nad X-ray differaction on wet and dry amino acid crystals	不明	川村(生物学会誌3巻2号の記述)	
田中稔純		I	<i>Sanguinolaria (Nuttallin) olivacea</i> (Jay) [イソシジミ] の Cercaria について	扁形動物(吸虫)	尾崎(生物学会誌3巻2号の記述)	
昭和28年(1953年)3月	橋本兼治	I	<i>Stylonychia pustulata</i> に於ける分裂について	原生動物(繊毛虫)	尾崎(生物学会誌3巻2号の記述)	
	天野 實	I	イモリ <i>Triturus pyrrhogaster</i> (Boie) の卵形成に於ける二倍体と三倍体との差異	イモリ	川村(生物学会誌5巻1号の記述)	
	中田篤男	I	<i>Condrostoma spatiosum</i> Ozaki & Yagi の小核の行動について	原生動物(繊毛虫)	尾崎(生物学会誌5巻1号の記述)	
	永野幸雄	I	ミジンコの初期発生に於けるグリコーゲンについて	ミジンコ	川村(生物学会誌5巻1号の記述)	
	橋本光弘	I	ヤマアカガエル <i>Rana temporaria ornativentris</i> の性分化について	ヤマアカガエル	川村(生物学会誌5巻1号の記述)	
	弘田礼一郎	I	日本産白蟻に種に於ける染色体の研究	シロアリ	阿部(生物学会誌5巻1号の記述)	
	舟田光義	I	とのさまがえる <i>Rana nigromaculata</i> における受精競争について	トノサマガエル	川村(生物学会誌5巻1号の記述)	
	屋敷和三	I	トカゲ及びヤモリの腺臓の細胞組織学的研究の概要	爬虫類	阿部(生物学会誌5巻1号の記述)	
	山田耕司	I	モンシロチョウの幼虫期に於ける腺の組織学的研究	モンシロチョウ	阿部(生物学会誌5巻1号の記述)	
	大崎春樹	I	スマガエルの排卵過程	スマガエル	川村(生物学会誌5巻1号の記述)	
	山田信夫	I	クモ類に於ける細胞内含有物の研究	クモ	阿部(生物学会誌5巻1号の記述)	

\*I: 卒業題目既知, II: 卒業題目が未知であるため, 在学中あるいは卒業後2年以内の論文を挙げた。

角括弧内は山内による補足である。

雑誌名の略は以下の通りである。

紀要: Journal of science of the Hiroshima University. Series B. Div. 1, Zoology

博物学会誌: 広島文理大高師博物学会誌

生物学会誌: 広島大学生物学会誌

関与していなかったが、終戦直後の混乱期において1947年9月卒業の門 洋一（1917～1985）の指導を行なった。

研究材料が判明している卒業研究について、用いられた研究材料を大まかな分類群ごとに整理した（表3）。これによると、研究材料として多く用いられたのは、節足動物、原生動物、および両生類であった。棘皮動物、環形動物、刺胞動物、海綿動物などは皆無であったことがわかる。阿部と平岩は、節足動物を多く用いつつも多様な分類群について指導していたことがわかる。なお、阿部の学生が多く用いたのは陸産節足動物で、平岩の学生が多く用いたのは海産節足動物であった。一方、尾崎が指導した学生が研究材料として用いたのは原生動物とその他の無脊椎動物（その多くは寄生性蠕虫類）に限られ、川村が指導した学生においては12名中10名が両生類を用いた。

表3 卒業論文で各種研究材料を用いた学生数

研究材料	指導教官*					合計
	阿部	平岩	尾崎	川村	瀧	
哺乳類	2	3				5
鳥類	1					1
爬虫類	4					4
両生類	8	4		10		22
魚類	3	1		1		5
原索動物	1					1
節足動物	15	7		1		23
軟体動物	3	5			1	9
その他の無脊椎動物	1		8			9
原生動物			18			18

\*阿部：阿部余四男，平岩：平岩馨邦，尾崎：尾崎佳正，川村：川村智治郎，瀧：瀧 巖

東京帝国大学動物学教室では1881年から1938年までの卒業論文に関して調査がなされている（福井，2000）ため、1932年（文理大第1回卒業式の年）から1938年についてのみではあるが、文理大動物学教室との比較を試みた。この時期、東京帝大では教授であった谷津直秀（1877～1947）のもと、生理学、実験発生学、内分泌学などが全盛であり、分類学、解剖学、および組織学は卒業研究のテーマとしてほとんど扱われていなかった（福井，2000）。それに対して、文理大動物学教室では、こうした分野がまんべんなく扱われており、研究テーマ選択の幅が広く、中等学校教員の養成という点では適していたのかもしれない。

## V. 受け継がれた研究，受け継がれなかった研究

文理大の動物学教室と現在の広島大学における動物研究の関係について以下に述べる。1951年（昭和26年）4月、新制理学部の動物学は三講座制となったた

め、阿部余四男，尾崎佳正，川村智治郎の3教授が各講座を担当した。これは、1947年に平岩馨邦が転出するまでの3人体制（阿部が組織学や細胞生物学など、平岩が実験形態学，尾崎が記載分類学を担当）を反映したものである。

川村智治郎が担当した動物学第三講座（後に動物形態学講座と名称変更）は、形式的には平岩の研究室を引き継いだ形となっている。しかし、2人の研究内容は異なっており、平岩の研究を川村が継承したわけではない。実際のところ、平岩と川村は不仲で、平岩の転出理由の一つは川村の着任であった（宇都宮妙子，私信 [宇都宮は1944年から川村研究室において科学研究雇いとして働いていたことから、この私信の信頼性は高い]）。動物形態学講座を率いた川村教授は、理学部長を経て、1966年（昭和41年）7月、広島大学第3代学長に就任した。1967年（昭和42年）6月、両生類に関する川村教授の研究業績を基礎として理学研究科附属両生類研究施設が創設された際、当時の動物形態学講座の研究陣の大部分は同施設に移った。そのため、川村の研究の流れは、同施設に受け継がれ、現在に続いている。なお、動物形態学講座では、1969年（昭和44年）4月、放射線医学総合研究所遺伝研究部長であった仲尾善雄（1915～?）が教授として着任した。

尾崎佳正が担当した動物学第二講座では原生動物を主な研究材料として用い、尾崎の指導を受けた柳生亮三（1905～2013）、片島 亮（1925～2000）、洲濱幹雄（1928～）が教育研究を引き継いだ。動物学第二講座は、動物分類学講座，原生生物学講座（1993年4月から）と名を変え、現在の理学部生物学科細胞生物学研究室に続いている。尾崎の研究が継承されてきたことは、同研究室助手（当時）であった小阪（1976）の「現在の広島大学理学部動物学教室での原生動物の研究基盤は先生により作られたといっても過言ではありません」という言葉にも示されている。

一方で、阿部余四男が担当した動物学第一講座では、阿部の定年退官に伴い、1957年（昭和32年）4月、東京大学助教授であった長濱 博（1914～1982）が教授として着任した。これによりこの講座での研究内容は大きく変わり、動物生理学講座として新たに発足したと考えて差し支えない。講座発足当初、それまでに在籍していた者は生理学の素人といってよかったため、学生と共に新たな研究方法を学んだ（門，1977）。動物生理学講座では、長濱教授の退官後、文理大動物学教室卒業生の門 洋一，続いて山田耕司（1931～）が教授となった。阿部の後継者として期待

されていた佐藤井岐雄は原子爆弾によって亡くなっており、また動物学第一講座で阿部の下で助教授を務めていた鈴木正将は阿部の定年退官により助教授のまま動物分類学講座に移った。鈴木は定年退職1か月まで助教授のままであったため大学院生を受け持つことができず(鶴崎, 2012), 阿部の研究の流れは現在の広島大学理学部(大学院理学研究科)に受け継がれることはなかった。

しかし、彼らと同じく阿部による研究指導を受けた稲葉明彦(1921~2005)は臨海実験所教授として教育研究に長く従事し、その流れは彼が指導した学生により広島大学大学院教育学研究科科学文化教育学専攻自然システム教育学講座と同大学院生物圏科学研究科附属瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター附属瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター(旧:水産実験所)に受け継がれている。

文理大動物学教室の卒業生のうち、岡本慶文(1917~1986)、蛭谷米司(1917~1997?), および水岡繁登(1927~)は広島大学教育学部(前身を含む)の教授となった。また、小林晴夫(1906~?), 兼田正男(1918~2007), および天野 實(1930~)は同大学総合科学部(前身を含む)の教授となった。このように、文理大動物学教室の卒業生は、広島大学理学部のみならず、教育学部と総合科学部においても教育研究に従事した。また、以下のように他大学で教育研究に従事した者も多い: 山形大学(鈴木庄一郎), 宇都宮大学(倉茂好雄), 早稲田大学(平 俊文), 鶴見大学(渡辺強三), 静岡大学(岡田相之助), 信州大学(高松好文), 愛知教育大学(武藤義信, 長谷川和), 愛知県立看護短期大学(中根一芳), 奈良女子大学(稲葉文枝), 大阪大学(中田篤男), 大阪府立大学(大垣昌弘), 大阪歯科大学(新池 保), 大阪帝塚山学院大学(田中斐太夫), 園田学園女子短期大学(鹿戸武治), 神戸大学(奥田義雄), 兵庫農科大学(宮田澄男), 神戸女学院大学(徳永千代子), 鳥取大学(屋敷和三), 岡山大学(守屋勝太, 内海耕慥), 川崎医療福祉大学(池田 章), 広島女子大学(灘光晋作), 安田女子大学(栗原 篤), 大下学園女子短期大学(井上幹造), 鈴峯女子短期大学(大塚外次, 森脇徳三), 山口大学(眞田正夫, 星出兵馬, 三分一肇), 徳島大学(豊岡磊造), 愛媛大学(森川国康), 高知大学(増田 晃), 福岡教育大学(福井利人), 九州大学(宮本正一, 大塚英司), 佐賀大学(品川恭徳), 長崎大学(森田真一), 大分大学(小林 晶, 吉田正雄), 熊本大学(吉倉 眞, 弘田礼一郎, 大崎春樹), 鹿児島大学(石窪 繁)など。したがって、文理大動物学教室で行われた教育研究は、

我が国の各地に伝えられたと言っても過言ではないだろう。

### 【謝辞】

貴重な情報を寄せていただいた山田耕司博士(元広島大学教授), 鶴崎展巨博士(鳥取大学), 中島 淳博士(福岡県保健環境研究所), 及び故 宇都宮妙子氏にお礼申し上げる。

### 【引用文献】

- 朝倉 尚編(2004):『平成十六年度年次別会員名簿』尚志会。  
浅沼昌平(1975):その日の動物学教室. 広島大学原爆死没者慰霊行事委員会編:『生死の火—広島大学原爆被災誌』広島大学原爆死没者慰霊行事委員会, 178-182。  
福井由理子(2000):東京大学動物学教室における卒業論文—第1回卒業(1881年)から谷津直秀の退官(1938年)まで. 生物学史研究, 65, 83-101。  
平岩馨邦(1949):白鼠と共に二十年. 科学知識, 29(2), 24-28。  
広島文理科大学創立五十周年記念事業会編(1980):『広島文理科大学創立五十周年』広島文理科大学創立五十周年記念事業会。  
稲葉明彦(2005):文理大懐古. 岡田孝章編:『追懐広島文理大』尚志会, 4-10。  
門 洋一(1977):長浜 博先生. 広島大学生物学会誌, 43, 1。  
門 洋一(1980):臨海実験所と私. 広島大学生物学会誌, 46, 79-80。  
川村智治郎(1963):両生類を材料とする生物学的研究の回顧. 広島大学生物学会誌, 30, 1-3。  
九州大学大学院農学研究院「博畜会」編集委員会(2001):『九州大学農学部畜産学科50年史』九州大学大学院農学研究院「博畜会」。  
小林 晶(1955):昭和20年の阿部先生. 広島大学生物学会誌, 6(2), 11。  
小林晴夫(1955):寛容なる阿部先生. 広島大学生物学会誌, 6(2), 7-8。  
小阪敏和(1976):故尾崎佳正博士. 広島虫の会会報, 15, 158。  
増田 晃(1980):動物学教室関係者 恩師・卒業生の思い出. 広島文理科大学創立五十周年記念事業会編:『広島文理科大学創立五十周年』広島文理科大学創立五十周年記念事業会, 307-308。  
皆森寿美夫(1955):寛容な先生. 広島大学生物学会誌, 6(2), 9。  
宮田澄男(1963):半数性の蛙. 広島大学生物学会誌, 30, 6-7。

- 森川国康(1955): 思いだすままに. 広島大学生物学会誌, 6(2), 9-10.
- 森田真一(1955): 阿部先生の追懐. 広島大学生物学会誌, 6(2), 5.
- 森田真一(1980): 阿部先生と佐藤井岐雄博士. 広島大学生物学会誌, 46, 57-58.
- 灘光晋作(1963): 体外排卵の研究. 広島大学生物学会誌, 30, 7-8.
- 中根一芳(1980): 平岩先生の鼠. 広島大学生物学会誌, 46, 79.
- 佐藤井岐雄・青田重忠(1940): 盲蛇の一種 *Typhlops braminus* の内部形態, 特に盲腸及び輸尿管の特殊形態について. 台湾博物学会会報, 30(200-201), 109-113.
- 佐藤井岐雄・宮内 力(1937): 蠓蝨腺細胞の微細構造, 特にリポコンドリアの存在に就いて. 動物学雑誌, 49, 319-329, pl.1.
- 曾根原周平(1959): 学生時代の思い出. 広島大学生物学会誌, 26, 19-20.
- 寺川智祐(1981): 蛭谷米司先生. 広島大学生物学会誌, 47, 3.
- 鶴崎展巨(2011): 鈴木正将先生(1914-2011). *Acta Arachnologica*, 60, 122-127.
- 鶴崎展巨(2012): 鈴木正将先生(Dr. Seisho Suzuki, 1914-2011)を偲んで. *タクサ*, 32: 1-4.
- 宇都宮妙子(2001): 佐藤井岐雄教授追憶の記1. 両生類誌, 7, 39-44.
- 吉倉 眞(1987): 『クモの生物学』学会出版センター.

(2013年8月31日受付)

(2013年11月22日受理)